様式Ｃ－１９

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月１日現在

機関番号：３０１０７
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２００８６
研究課題名（和文）　解釈学と歴史主義－Ａ・ベークとＪ・Ｇ・ドロイゼンについての事例研究－
研究課題名（英文）　Hermeneutics and Historicism: A Case Study on A. Boeckh and J. G. Droysen
研究代表者
安酸　敏眞（YASUKATA TOSHIMASA）
北海学園大学・人文学部・教授
研究者番号：４０１８３１１５

研究成果の概要（和文）：本研究は、《解釈学》と《歴史主義》のモティーフが、Ａ・ベークとＪ・Ｇ・ドロイゼンにおいていかに関連し合っているかを、原典資料に基づいて究明しようとしたものである。研究の結果として、①シュライアーマッハーの一般解釈学においては潜在的であった《歴史主義》の契機は、ベークの「認識されたものの認識」において初めて明確化したことと、②《解釈学》と《歴史主義》の水流はドロイゼンの『史学論』において完全に輻湊するようになったことが確認された。

研究成果の概要（英文）：This study sought to clarify the relationship between 'hermeneutics' and 'historicism' in the thoughts of the classical philologist August Boeckh and the historian Johann Gustav Droysen. Research was conducted based on their German original texts. It is the result of this study that 1) the motif of historicism, still latent in Schleiermacher's general hermeneutics, asserted itself first in Boeckh's formula: "*das Erkennen des Erkannten*"; 2) the merging of hermeneutics and historicism was fully attained by Droysen in his *Historik*.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２００９年度 | 1,600,000 | 480,000 | 2,080,000 |
| ２０１０年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| ２０１１年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 3,400,000 | 1,020,000 | 4,420,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、思想史
キーワード：解釈学、歴史主義、ベーク、ドロイゼン、シュライアーマッハー、ディルタイ、トレルチ、ベルリン精神

１．研究開始当初の背景

（１）解釈学が現代哲学の中心的トピックであることは、ハイデガー、ガダマー、リクールなどを引き合いに出すまでもなく、異論の余地がない。これに対して、少なくともわが国では、歴史主義の議論は過去のものとなっ

ており、今日それについて語られることは稀である。しかしドイツでは、前世紀の八十年代以降、歴史主義に関する論議が活発化してきて、ふたたび新たなアクチュアリティを獲得している。すなわち人文・社会科学の複数の分野で、十九世紀末から二十世紀初頭にかけての学問論に対する再評価の動きが起こり、ハルナック、ヴェーバー、トレルチ、シェーラー、カッシーラーなどの業績の見直しが精力的になされている。

（２）歴史学の分野でも、十九世紀後半から二十世紀初頭の歴史学や社会学の諸理論について、検証し直す作業が行なわれており、N. Hammerstein (Hrsg.), *Deutsche Geschichtswissenschaft um 1900* (Stuttgart, 1988)、O. G. Oexle, *Geschichts wissenschaft im Zeichen des Historismus* (Göttingen, 1996)、O. G. Oexle & J. Rüsen (Hrsg.), *Historismus in den Kulturwissenschaften* (Köln-Weimar-Wien, 1996)、G. Scholtz (Hrsg.), *Historismus am Ende des 20. Jahrhunderts* (Berlin, 1997)などは、その消息をよく伝えている。こうした見直し作業において歴史主義に注目が集まる理由は、歴史主義がその当時の人文科学と社会科学の議論の中心に位置していたことと、それによって提起された根本的な問題が未解決のまま今日に至り、形を変えて現代の主要な問題となっているからにほかならない。

（３）筆者はもともとトレルチ（Ernst Troeltsch, 1865-1923）研究から出発したので、「歴史主義」の問題は四半世紀前から筆者の問題意識の中心に位置してきたが、九年ほどまえに行なった歴史主義の概念史・問題史を再検証する作業を通して、解釈学の成立と歴史主義の水源が深く関係し合っている事実を直観的に予感した。その後この予感は、ヨアヒム・ワッハの大著『理解』*Das Verstehen* (Tübingen, 1926-33)を読むことで、より深い確信へと変わった。シュライアーマッハーからベーク、ドロイゼン、ディルタイ、トレルチという方向線が、こうして自分の意識のなかで日増しに重要性を高めてきた。

（４）一般解釈学のパイオニアは、「近代神学の父」と称されるシュライアーマッハー（Friedrich Schleiermacher, 1768-1834）であるが、卓越したプラトン研究者でもあった彼は、本質的に「非歴史的な思想家」(ein unhistorischer Kopf) であり (A. Schweitzer, *Geschichte der Leben-Jesu-Forschung* [Tübingen, ²1913] , 63)、解釈学と歴史主義の接触は、この神学者においては未だ生じていない。しかし彼の解釈学を継承したベーク（August Boeckh, 1785-1867）になると、解釈学理論のなかに歴史主義の契機が濃厚に流入し、両者の結びつきはドロイゼン（Johann Gustav Droysen, 1808-1886）、さらにディルタイ（Wilhelm Dilthey, 1833-1911）においてより深まっていく。

（５）A・ヴィットカウによれば、歴史主義の問題史の発端は、人間とその文化が「歴史的に成ったもの」（die geschichtliche Gewordenheit）であることの自覚と、「人文科学における歴史学的認識方法の確立」である。両者は大局的に見れば、「十八世紀末以降、とりわけ十九世紀において遂行された、西洋的思惟の歴史化という同一の包括的な精神史的現象の異なったアスペクト」であり、そして思惟の歴史化という現象のこの二つのアスペクトを最初に洞察したのが、ブルクハルトとドロイゼンであるという（Annette Wittkau, *Historismus. Zur Geschichte des Begriffs und des Problems* [Göttingen, ²1994], 25)。

（６）この見方は間違いではないが、しかしこれだけでは《解釈学》と《歴史主義》の相互関連性は見えてこない。両者の結びつきは、ドロイゼンとブルクハルトの共通の師であるベークの古典文献学に遡ってはじめて見えてくる。前者はベルリン大学でのベークのゼミ生であり、後者もベークの講筵に列している。ちなみに、ディルタイもベークのもとで教授資格を獲得している。ここにわれわれがベークに注目する理由がある。《解釈学》と《歴史主義》の邂逅と結合は、ベークの古典文献学、とりわけその解釈学理論において、興味深い仕方で生起していると思われる。

（７）筆者はトレルチ研究やレッシング研究（拙著『レッシングとドイツ啓蒙』参照）などを通じて、思想史研究の方法に関連して、解釈学の問題にも徐々に関心を寄せるようになっていたが、上述したように、歴史主義の概念史・問題史を再検証する作業を通して、解釈学の成立と歴史主義の水源が深く関係しているとの直観を得たので、そこで解釈学の伝統と歴史主義の伝統が合流する思想史的プロセスを、シュライアーマッハー、ベーク、ドロイゼン、ディルタイ、トレルチに即して検証してみようと考えるに至った。しかしいきなりこの５人全員について考察するのは無謀だと思われたので、第一段階としてベークとドロイゼンについて、原典に基づいて実証してみようと考えたのであった。

２．研究の目的

（１）本研究の目的は、草創期のベルリン大学を代表する古典文献学者のアウグス

ト・ベークと、彼の学生でのちに「プロイセン・小ドイツ学派の真の創設者」となった歴史学者のヨーハン・グスタフ・ドロイゼンを研究対象に据えて、彼らにおいて《解釈学》（Hermeneutik）と《歴史主義》（Historismus）のモティーフがいかに密接に関連し合っているかを、原典資料に基づいて究明しようとしたものである。

（２）この研究自体はベークとドロイゼンに対象を絞った事例研究であるが、そもそもの構想の出発点からして、この研究は、解釈学と歴史主義の水流が合流する運命的な輻湊のプロセスを解明しようとする、より大がかりな研究プロジェクトの一環として、筆者の研究計画のなかでは位置づけられていた。すなわち、シュライアーマッハーから出発して、ベーク、ドロイゼン、ディルタイを経由して、ついにはトレルチに至る「ベルリン精神の系譜学」が、最初から予感的に想定されており、かかる系譜学のなかで解釈学の伝統と歴史主義のそれとの輻湊が、いかなる問題性を孕んでくるのかを、具体的に検証しようと考えた次第である。

３．研究の方法

（１）研究の方法としては、ベークとドロイゼンの原典資料を精読読解して、そこから両者における解釈学と歴史主義の契機を剔抉するやり方を採用した。ベークに関しては、August Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, herausgegeben von Ernst Bratuscheck, 2. Aufl. besorgt von Rudolf Klussmann (Leipzig, 1886)を主要テクストとし、それを補うものとして七巻本の *Gesammelte kleine Schriften* (Nachdruck, Hildesheim, 2005)をも用いた。ドロイゼンに関しては、旧版の Johann Gustav Droysen, *Historik. Vorlesungen über Enzyklopädie und Methodologie der Geschichte*, herausgegeben von Rudolf Hübner, 5. unveränderte Aufl. (München, 1967)によらず、最新の校訂版 Johann Gustav Droysen, *Historik. Rekonstruktion der ersten vollständigen Fassung der Vorlesungen (1857) Grundriß der Historik in der ersten handschrift- lichen (1857/1858) und in der letzten gedruckten Fassung (1882).* Textausgabe von Peter Leyh (Stuttgart-Bad Cannstatt, 1977)、*Historik*, Bd. 2 (2007), *Historik. Ergänzungsband* (2007)を主要テクストとし、ドロイゼンの『史学論』の思想発展に細心の注意を払った研究を心掛けた。

（２）基本的には、原典テクストの入念な読解・解釈作業を中心として研究を進めたが、ベークとドロイゼンだけでなく、より広い問題関心の研究対象がすべてベルリン大学に関係しているので、そこを舞台とした思想家相互間の知的交流や人間関係などについても、その実態を明らかにする努力をした。文献資料としては、Max Lenz. *Geschichte der Königlichen Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin*. Bd. 1-4 (Halle, 1910-1928)、Adolf von Harnack. *Geschichte der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin*. Bd. 1-3 (Berlin, 1900)、Michael Erbe (Hrsg.). *Berlinische Lebensbilder Geisteswissenschaftler* (Berlin, 1989)、Verhard Gerhardt et al. (Hrsg.). *Berliner Geist. Eine Geschichte der Berliner Universitätsphilosophie* (Berlin, 1999)などを利用した。これ以外にも、ベークとドロイゼンの接触点を調べるために、ベルリン大学等の実地調査を行った。

（３）さらに研究を遂行する過程で、《解釈学》と《歴史主義》という主題を、より一般的に神話的表象にまで押し戻して考察することも思いつき、クリオとヘルメースが西洋の絵画や彫刻においてどのように表現されてきたのか調べるために、ルーヴルをはじめウィーン、ベルリン、ミュンヘン、ドレスデン、アントワープなどの美術館にも足を運んだ。こうした美術館見学の成果は、今回の研究結果には必ずしも十分に反映されていないが、そこから得たイマジネーションとアイディアは、今後の研究に大いに役立つと思われる。

４．研究成果

（１）研究目的に記したとおり、本研究はより大きな研究計画の一部として構想・実践されたものであるが、実際に研究を進めてみると、当初の予想をはるかに超えて順調に研究が進捗し、単にベークとドロイゼンだけでなく、シュライアーマッハーからトレルチまでの、ベルリン大学ゆかりの５人の思想家を一つの線で結ぶところまで行き着いた。そこで「《ベルリン精神》の系譜学」という副題をつけて、『歴史と解釈学』という表題の書物にまとめ上げることにした。

（２）全体で約六百頁に達する大部のこの著作は、平成２４年度科学研究費補助金の研究成果公開促進費（学術図書）の交付を受けて、早ければ７月中に、遅くとも９月には刊行される予定である。研究成果としては、厳密にはこれをご覧頂くのが一番であるが、今しばらくは人目に触れないので、以下に研究の成

果の要点を簡単に記しておきたい。

（３）近代における一般解釈学の構想は、近代プロテスタント神学の父であり、またプラトンの著作の翻訳者でもあったシュライアーマッハーをもって嚆矢とするが、《歴史主義》の契機は、彼においてはまだ表に出てきていない。なるほど『神学通論』に見てとれるように、シュライアーマッハーは神学全般の「歴史化」（Historisierung）を企図したが、しかし彼の解釈学は言語学をモデルに構想されたものであった。すなわち、彼の解釈学は文法的解釈と技術的解釈ないし心理学的解釈の二つの部分からなり、そこではまだ歴史的解釈に独立した機能と役割が与えられていなかった。

（４）《歴史主義》の契機は、シュライアーマッハーのハレ時代の学生であり、のちにベルリン大学で彼の同僚になったアウグスト・ベークの古典文献学の体系において、はじめて明確な形をとる。彼が文献学の課題を「認識されたものの認識」（das Erkennen des Erkannten）として捉えたことはつとに有名であるが、彼のこの定式のなかに《歴史主義》の契機が見事に顕在化してきている。Ｇ・Ｐ・グーチが言うように、ベークは「古典文献学を歴史科学に変化させた」のである。かくして、師の言語学モデルの解釈学は、弟子のベークによって歴史学モデルの解釈学へと転換され、《解釈学》と《歴史主義》の明確な結びつきがここに成立した。

（５）ベークの古典文献学のなかに明確な姿をとった《歴史主義》のモティーフは、彼の学生のドロイゼンの『史学論』*Historik* において、やがて万人が認めるところのものとなる。彼の『史学論』には「歴史のエンチクロペディーおよび方法論に関する講義」という副題が付いているが、そこからもわかるように、これはベークの『文献学的諸学問のエンチクロペディーおよび方法論』に倣ったものである。すなわち、ドロイゼンは古代文献学におけるベークの方法を、歴史学一般の方法にまで深化発展させたのである。「探究しつつ理解すること」（forschend zu verstehen）という彼の歴史学研究の方法は、歴史学研究に解釈学のモデルを導入し、《歴史主義》に決定的な弾みを与えた。

（６）ドロイゼンを継承してそれを哲学的考察の前面に据え、人間の「歴史性」について多角的な分析を展開したのが、同じくベルリン大学の俊英ディルタイであった。彼の終生のモットーは、「生を生それ自身から理解しようとする」ことであり、そこから彼は「歴史的理性批判」（eine Kritik des historischen Vernunft）を目論んだ。しかし彼の解釈学的哲学は、最終的には、「歴史的相対主義」の難問に逢着する羽目になった。最晩年のディルタイは、「いまにも襲来しようとしている確信のアナーキー（Anarchie der Überzeugungen）を克服する手立てはどこにあるのだろうか？」と嘆いた。

（７）このようなディルタイ的苦境を解決すべくベルリン大学に着任したのが、神学者であると同時に哲学者でもあったトレルチである。彼のベルリン大学就任の第一声は、「わたしは価値のアナーキーに終止符を打つためにこちらに来ました」（ich bin hergekommen, um der Anarchie der Werte ein Ende zu machen）というものであった。ここからも窺えるように、トレルチはディルタイの仕事を継承し、歴史的相対主義の問題を克服することを、みずからの至上命題と受けとめていた。彼の『歴史主義とその諸問題』は、歴史主義の問題をめぐる議論の頂点を示すものであるが、そこには《解釈学》と《歴史主義》の輻湊のドラマのクライマックスが示されている。

（８）本研究によって、シュライアーマッハー、ベーク、ドロイゼン、ディルタイ、トレルチという系譜の特質が、従来知られていなかった深さにおいて明確になった。しかしわが国では、ハイデガーやガダマーの圧倒的な影響下にあって、歴史主義そのものや所謂「ロマン主義的解釈学」を見直す動きは、驚くほど鈍くかつ低調である。本研究の成果は、このような現状に一石を投ずる挑発的なテーゼを多く含んでいるので、上掲書が刊行された暁には、かなりの反響が見られるものと予想される。いずれにせよ、本研究によって解明された視点から、ハイデガーやガダマーなどの解釈学を批判的に再検証することは、今後のわれわれに課された重要な課題であろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１０件）

① 安酸敏眞、シュライアーマッハーにおける一般解釈学の構想、北海学園大学人文論集、査読無、50 号、査読無、2011、23-59、

② 安酸敏眞、ディルタイにおける解釈学と歴史主義、北海学園大学人文論集、査読無、49 号、2011、1-33、
③ 安酸敏眞、クリオとヘルメース、北海学園大学人文論集、査読無、48 号、2011、43-95、
④ 安酸敏眞、ドロイゼンの「探究的理解」について、年報新人文学、査読有、7 号、2010、166-214、
⑤ 安酸敏眞、ニーバー[2]と「エルンスト・トレルチの影」、聖学院大学総合研究所紀要、査読有、48 号、2010、137-199、
⑥ 安酸敏眞、「思想史」の概念と方法について－問題史的研究の試み－、北海学園大学人文論集、査読無、46 号、2010、97-145、
⑦ 安酸敏眞、解釈学と歴史主義－Ａ・ベークとＪ・Ｇ・ドロイゼンを中心に－、北海学園大学人文論集、査読無、45 号、2010、143-175、
⑧ 安酸敏眞、アウグスト・ベークの解釈学、年報新人文学、査読有、6 号、2009、8-40、
⑨ 安酸敏眞、アウグスト・ベーク『文献学的諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』－翻訳・註解（その５）－、北海学園大学人文論集、査読無、44 号、2009、57-95、
⑩ 安酸敏眞、アウグスト・ベーク『文献学的諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』－翻訳・註解（その４）－、北海学園大学人文論集、査読無、43 号、2009、27-51、

〔学会発表〕（計３件）
① 安酸敏眞、Ernst Troeltsch and German Historicism, X. Internationaler Kongress der Ernst-Troeltsch-Gesellschaft, 2011 年 10 月 10 日、ミュンヘン
② 安酸敏眞、Ｊ・Ｇ・ドロイゼンにおける歴史主義と解釈学、日本宗教学会第 69 回学術大会、2010 年 9 月 4 日、東洋大学
③ 安酸敏眞、解釈学と歴史主義－Ａ・ベークとＪ・Ｇ・ドロイゼンを中心に－、京都ヘーゲル読書會、2010 年 1 月 10 日、京大会館

６．研究組織
(1)研究代表者
安酸 敏眞（YASUKATA TOSHIMASA）
北海学園大学・人文学部・教授
研究者番号：40183115

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：